

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	学習院大学
申請者氏名	飯沼 慶一
分担者氏名	宮城邦治
研究課題名	沖縄本島「やんばる」の自然と共生する文化の維持・継承に関する研究



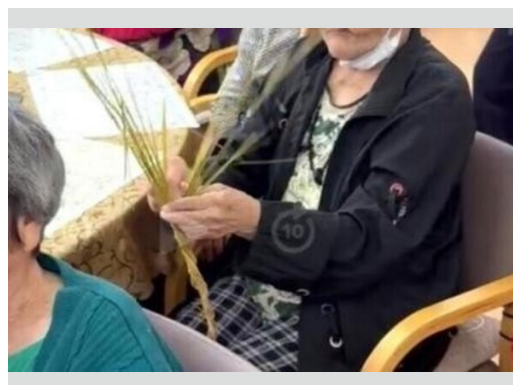
島袋氏インタビュー調査（黙々百年曼草庵にて）



製作したアーカイブス（アダン）このほか3本製作



高校生へのWS 熱心に取り組む



老人施設でのWS 動画を見ると勝手に手が動く

【研究の概要】

沖縄本島北部「やんばる」には豊かな自然環境と深く繋がった食文化、伝統行事、伝統技術など自然を利用した長年にわたる人びとの営みがあるが、その自然環境との関係性をにつけている人々の高齢化・過疎化から、自然を利用した人の営みの継承は消滅の危機にある。

本研究は上記の認識のもと、「やんばる」固有の地域文化の再評価、伝統文化・伝統技術などの固有の自然と共にある文化の維持・継承を行うための映像アーカイブスを作成・教材化しさらに教育実践を行った。

島袋氏のインタビュー調査では、やんばる文化伝承者の思いやその考えに至る経緯を明らかにした。また「アダンを食べよう」「ソーグッチ（正月）下駄をつくろう」「イリ（キリ）を作って使おう」「竹で鳥かごをつくろう」の4本の映像教材を作成した。教材を使った実践を高等学校・老人施設・県民へのWS等の実践を行った。高齢者は教える主体としての誇りを取り戻し、学校現場では子どもが生きる技を体得することがわかり、それは、家族の歴史と知恵が次世代へ自発的に継承されることにつながるであろう。

このように本研究は『土着的環境教育』として、多くの教育効果があると考えられる。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

1. 実地調査

本研究では現地協力者らと共に、12回の実地調査を行った。初代名護博物館館長のやんばるの文化伝道者である島袋正敏氏へのインタビュー調査1回、島袋氏の映像撮影5回、高等学校や老人施設やイベントでの6回の実践調査を行った。

実践調査では、沖縄県事業「沖縄ぬちぐすい」・「クラフトフェア」のイベントで映像上映を行った。また嘉手納高等学校では、映像を見た上で実際にススキの箒を作成した。そして「デイサービスかいほう」「ぶらかす」の2か所の老人施設で映像上映を行った。

2. 研究の成果

①映像教材の作成

映像教材は「アダンを食べよう」「ソーグッチ（正月）下駄をつくろう」「イリ（キリ）を作って使おう」「竹で鳥かごをつくろう」の4本を作成した。

「アダンを食べよう」（写真2）

やんばるでよくみられるアダンについての話やどのように食していたか。

「ソーグッチ（正月）下駄をつくろう」

正月の下駄を父親が家族全員分作っていたという。木の切り出しから製作まで。

「イリ（キリ）を作って使おう」

工具も自作していた。釘からキリを作る。

「竹で鳥かごをつくろう」

メジロ捕獲用に二段式の竹で作った鳥かご作り。

この4本の映像は、本研究での実践研究で使用するだけでなく、多くの人や団体に教材として使用できるように、以前に作成した映像と共に以下のYouTubeで公開している。

https://www.youtube.com/channel/UC8ufclVWvfiK44_AyrAHBNA

②実践研究

映像教材を使い、イベント・高等学校・老人施設で実践研究を行った。イベントでは映像上映を行い、多くの沖縄県民が興味を持って昔のやんばる文化に映像を見て、実際にWSで体験もした。また嘉手納高等学校では、生徒たちは沖縄の昔の文化を積極的に学び、WSには熱心に取り組む様子から、総合的な学習の時間に有用な教材であることが分かった（写真3）。

そして特筆すべきは、老人施設で行った映像上映である。映像を見た老人の方々は自然に手が動きだしたり、昔の体験談や「私の地域ではここが違う」などを話し始めたりし、生涯学習や回想法的活用があることが分かった（写真4）。

本研究の意義は三世代を繋ぐ文化還流にある。福祉施設での上映で高齢者は教える主体として誇りを取り戻し、学校現場では子どもが生きる技を体得する。最大の効果は、伝統を知らない親世代が映像を機に自らの親へ問い直す点である。家庭内で埋もれた記憶が掘り起こされ、家族の歴史と知恵が次世代へ自発的に継承されることが考えられる。

③インタビュー調査（写真1）

2025年12月12日に島袋正敏氏へのインタビュー調査を行った。島袋氏は初代名護博物館館長であり、やんばる文化の伝道者であるが、アグー豚を復活させたり、名護博物館設立では住民が家に眠っている展示物を持ち込んだり、豚を住民と共に解体して展示物作りを行ったりと、住民参加の博物館づくりを行った方としても有名である。

これらの活動のルーツは何か尋ねると、島袋氏の考え方の基盤となっていたのが、名護市の渡具知裕徳市政で策定された「第一次名護市総合計画・基本構想（1973）」であり、その思想的基盤となっていたのが「逆格差論」である。

「逆格差論」とは、名護は経済指標からは格差の下にあるかもしれないが、それは逆に見れば豊かな自然を持つことを意味し、自然に根差した経済発展を目指せば＝内発的発展を志せば、新しい自然を活かした地域づくりができるのではないか、という思想である。

この考え方のもと、島袋氏を含む20代から30代の若い職員13名は、岸本建男（後に市長）をリーダーに、地域自治研究会を組織し、勉強会を繰り返したという。沖縄が本土復帰した直後で内地の新しいいいものを取り入れようと熱心に勉強会やお金を出し合って視察に出かけたりとしたという。

そんな中、島袋氏は名護湾が埋め立てられてしまった危機感と国際海洋博覧会に伴った自然破壊が起こるのではないかと危機感から「やんばる自然を守る会」を作り、埋立地には企業誘致をせず、市民が緑や海と親しむことができる

「21世紀の森公園」を子どもたちと海浜植物種を植え復活した整備する活動、国道が自然に影響ないようにする活動などを行った。島袋氏の思想のもと自然保護・環境保全にあったということであった。

他には、インタビュー調査から、島袋氏は名護市職員時代には以下の活動を行ってきたと語っている。

・沖縄文化展の開催：「市民参加市民参加」と言いながら職員が出なくて「市民参加」とは言えないとして、基礎となる「職員参加」をしてこそ「市民参加」になるとして市役所職員が参加しての実践を行った。

・老人学級：社会教育課に在籍中は老人学級も多くの地域で始めた。

・市民大学：⇒大学誘致懇話会に変わり、その後、名桜大学誘致に成功した

・図書館準備室・名護博物館準備室：10年の準備期間で開館

・古い地名を残す活動：地名研究の勉強会を行いながら、住居表示に古い地名を残した。

また、島袋氏は10年の準備期間を経て旧名護博物館の初代館長となったが、そこに島袋氏の考え方が凝縮されている

る。博物館は準備期間で環境への影響などを調べた上で、地域に何を波及させていくかのコンセプト、博物館では「名護・やんばるの生活と自然」（在来家畜・薬草・在来農作物など）を作り開館した。島袋氏は生活と自然をトータルにとらえていくことが大切であると話している。

博物館収蔵庫も環境のことも考え、どのようなものが良いのか海外の博物館を自費で視察した。そこでは最新の電気を使ったものでなく、元々の道具などをおいていた環境が大切であることに気づき、収蔵庫を空調のない高倉方式にした。博物館自体も設計者と話し合いながら空気が抜けるような構造にして、屋上に芝を植えた。

「博物館は、特に父祖の時代の生活文化史を、追体験を通して学ぶという観点を重視することが大切である」と述べている。

しかしながらこのように多くのことを成し遂げてきた 島袋氏であるが「私が行ってきたこのような考えが、若い人たちになかなか伝わらない。」とも話している。

本研究では、この言葉を重く受け止め、映像やWSを通じた「生活文化の追体験を通して学ぶ教材づくり」そしていかに普及していくかは島袋氏と共通する課題であり、この研究を行う基盤となっていることを改めて確認した。

2. 今後の研究の見通し

本研究は、やんばるの昔の暮らしから未来を学ぶ教育・文化活動として続けていく。

そのためには、以下の4点を軸に研究を進めていく予定である。

1. 継承（知恵・技術・文化を次世代へつなぐ教材づくり）

現代の利便性の中で先人の知恵（沖縄でいう「じんぶん」）の喪失が進む中、今を逃すと二度と聴くことができなくなる高齢者の記憶や技術を、伝える側になれるほどの解像度で詳細に記録することが急務である。特に調査対象者である島袋氏は、やんばる文化を体現でき、東海岸西海岸の違いなどの知識があり、しっかりした語りで説明もできる貴重な伝承者である、しかしながら島袋氏は高齢であるので、島袋氏の技や想いを伝える映像アーカイブスを今のうちに増やしていきたい。島袋氏の他にもやんばるの自然と共存してきた文化の体現や語りのできる伝承者を探し出しアーカイブスを残していくことが必要であろう。

2. 教育実践（学校や社会教育施設・老人施設など連携して学びの場をつくる）

アーカイブスを活かすために、今後さらに学校教育・社会教育と連携を取りながら教育活動につなげていく必要がある。今回の研究では高校生・老人そして一般県民に教育実践を行い成果があった。特に老人施設では映像を見る方々の明らかな変化が見られた。しかしながら若い世代や一般の方々への教育活動はまだまだ十分でない。特に学校教育において「総合的な学習・探究の時間」等に合った教材化や指導案作りが必要である。

若い世代が過去に自分たちの地域にあった地域循環型の生活を知ることが、環境教育そして持続可能な地域づくりにつながってくれるのではないかと考えている。

また、イベントやデイサービスなどで映像を公開し手仕事などの実践と合わせて行う活動を広めることも行っていく。

3. 発信（デジタルアーカイブや研究成果を広く共有する）

現在はYouTube上で映像アーカイブスを公開しているが、多くの人々が見たり使ったりできるように、他の発信方法や、他団体・行政・社会教育施設などとのアーカイブスの共有などが必要である。

また、老人施設での顕著な効果が見られたので、老人施設でのアーカイブの利用をしやすいするための発信等も行っていく。

4. 新しい課題（現代の暮らしや防災、環境問題に生かす）

今回防災とのつながりについては、アダンというやんばるでよく見かける植物が災害の際に貴重な食料になることなどはあるが、まだ十分に防災との関係を検討できていない。今後は、やんばるの昔の文化と防災とのかかわりについて深めていくことが必要である。

また、『土着的環境教育』『環境教育』『ESD』『SDGs』などのかかわりについてもしっかりとした検討を行っていく。

この研究の方向性が定着すれば、「生活文化を未来へつなぐモデル」として、沖縄だけでなく環境教育の一領域として社会的な価値も高まっていくと考えられる。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

2026年9月11-13日の日本環境教育学会第37回年次大会（東京）での

「沖縄本島「やんばる」の自然と共生する文化の維持・継承に関する研究」

として発表申し込み済み。